

絆

きずな

～親友なの～



地域密着型特別養護老人ホーム ノアノアテラス

介護職員：中山つなみ ユニットリーダー：佐々木ひとみ

はじめに

みなさんは、大切な人を失い
心にポツカリと穴が空いてしまったことが
ありますか？



そのとき、
どのようにして心の隙間を
埋めましたか？

この事例では、大切な友達を失ったA様のストレス
をどうすれば解消できるのかを検討してきた経緯を
考察し、発表します。

事例紹介

A様 83歳
H28年1月8日入所 要介護3

<既往歴>
・脳梗塞
(片麻痺があるが、歩行器を使用して歩行可。
介助者の付き添いは必要)
・脳血管性認知症



職員→「婦人部長」「ボーイさん」
他入居者→「おばあさん」「おじいさん」

● 通常の会話能力はあるが、うまく会話ができない
入居者とは仲良くなれず、職員との会話が多くなっていた。

● 短期記憶に乏しく、数時間前のことを忘れてしまいがち。

顔と名前が一致する人が
施設にほとんどいない状態

そんなA様が、ある出会いをきっかけに日々の生活が変わってきた

B様との出会い

H28年2月28日 B様入所。
B様は物静かで口数の少ない女性だった。



ビールでお酌しあい、楽しそうに
過ごす姿があった。



席もお隣さん。
居室もお隣さん。

2人は、お互いに気になる存在になった。
同じ時間を共有し、いつしかA様とB様
は名前で呼び合う仲になった。



A様の孤独は、B様の存在によって解消されたかにみえた。

しかし8月・・・B様の容態が急変し、数日間
居室で過ごしたあと亡くなってしまった。

通夜参列

通夜への参列に、A様を連れて行っはどうか？という話が持ち上がった。

時間が経てば
B様が亡くなったことを忘れて
普段の生活に戻るのではな
いかな？

お通夜へ行くことによって、
更なる悲しみを
与えてしまうのではないかな？

亡くなったことを伝えない方が
いいのではないかな？

職員間で慎重に話し合った。

しかしA様から涙ながらに訴えがあった。

「ずっとBさんのことが気になっていました。私が部屋に戻るとき、Bさんが横になっているのが見えたので激励したいと思っていました。でも勝手なことをしてはいけないと思って我慢していたのです。あのとき、無理をしてでも会いに行けばよかったと後悔しています」

A様は、B様が亡くなられたことに気づいていたのだ。

A様は私たちに支えられながら焼香をし、B様との最期のお別れをした。

「姉(B様)はAさんのことをよく話していました。『親友なの』と言っていたんです。仲良くしてくださって、ありがとうございました」



「神楽坂のお祭りには、ぜひ家へ遊びに来てくださいな」



「私の手作りプリンをごちそうするわ」

「親友なの」

私たちは2人の絆の深さを知り、胸が熱くなった。

B様を失って・・・

心にぽっかりと穴が開いたように、ぼんやりと外を見つめている時間が増えた。



C様が入所された

- どう話していいか、わからない
- B様の代わりにはならない・・・

居室で過ごす時間が増えた

- 「部屋に行くわ。その方がいいのよね・・・」
- 「こうして横になっていれば、みなさん助かるみたいですし私も楽ですから・・・」

「私ね、家に帰りたい」

私たちは、少しでも心地よく過ごせるようにしたいと伝えていった。

心の葛藤・家族の想い

家族から

- 「帰りたいと訴えていた。」
- 職員の対応は本人に対する配慮があったのか？信仰宗教について差別的であったか？

本人

- 職員の対応に憤慨！自分の行動を一方的に否定された！
- 自分の進行している宗教について「嫌いなんだよね」と言われた。

職員

- 苦情としてとりあげ、全体の問題として自分たちの対応をふり返った。
- どのような善意ある言葉も相手に伝わらなければ意味がない！

自分の価値観を押しつけてはいけな。

ケア方法の見直し

課題整理

- (1) 何でも話せる人がいない
- (2) ユニットに気の合う人がいない
- (3) 居場所がない
- (4) 歩けるのに、自由に動けない

対応方法

- (1) 外食の機会に想いを聴く
- (2) ユニット外に交流の幅を広げる。婦人会の開催
- (3) 役割を見つける
- (4) 居室内の環境を見直す。家族とリスクについて話し合う。

課題

- (1) 何でも話せる人がいない
- (2) ユニットに気の合う人がいないに、対して・・・

ユニット内だけでなく、ユニット外に交流の幅を広げた



女子会ならぬ「婦人会」の開催



腕の見せ所！生け花教室

課題

- (3) 居場所がないに、対して・・・

他入居者の食事介助を手伝っていただき「役割」をもてるようにした



「お手伝いさせてください」



「出来ることをやるのは、当たり前のことです」

課題
(4) 歩けるのに、自由に動けないに、対して...

リスクと行動の自由をどのように考えるか検討した。

「自由に行動するため」
の環境づくり

少しでも、心地よい空間を

やすらぎを感じてもらうため
居場所を見つけてもらうため

自由度を高める
危険リスクが高まる






新たな出会い

12月に入り、D様が入所された。

認知症が進行しているD様に
困惑することもあったが、
A様はすすんでD様の手助けをする
ようになった。

A様の気持ちを理解し尊重する
ことで、A様にも変化がみられる
ようになった。

「Bさんにも食べていただきたいわっ
たわ...私の手作りプリン。」
さあ、みなさん食べてくださいな」

「Dさん、オヤツがきたわよ。
一緒にいただきますよ」





変化

一時は閉じこもりがちになり居室で過ごすことが増えた
A様だったが...

職員や他入居者との関係が良くなるにつれ、居室の
外で過ごすことが増えていった。

交流が増え、
笑顔も増えた





ユニット外のさまざまな
人たちとの“ふれあい”

パブリックスペースで談笑

地域のお祭りに参加

カレーを作り、ふるまう

みんなのために、
自分ができること
をしたい

秋祭りでステージ上の職員に声援







家族と過ごす
大切な時間




「いつも私ばかり飲んでるわね、
私、職員のみなさんと乾杯したいわ」

念願の
“みんなで乾杯！”

みんなで
楽しい時間を
共有したい





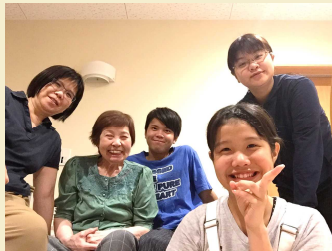
A様、B様の「親友」という言葉に驚かされ、それを感じとれなかった
私たち・・・

私たちも、A様にとってB様のような存在になりたいと強く感じた。

そしていつか、A様の心に問いかけたいと思う。

**「私たちも、あなたと“絆”を築けた
でしょうか？」**

ご家族と居室にて。



母の日にカーネーションの贈り物



ご清聴ありがとうございました。